

平成30年度 岡山県立西大寺高等学校 学校評価書

学校経営目標	新しい時代を生き抜く力を身に付けた生徒の育成－7つの力の育成を核として－	重点目標と評価	【中間評価】	【最終評価】	個別評価	総合評価	評価基準
		重点① 授業力のさらなる向上 主体的・対話的で深い学びの実現など、授業力の向上に努める。 計画と評価：各教科での研究授業等の実施及びOJT校内チーム研修の継続とその連携 西高版授業スタンダードの策定とその実践 校外研修等で得た知識・情報の共有	・指導教諭を中心として、OJT校内チーム研修や公開授業(研究授業)を進めている。また、他校での指導教諭に研究授業への参加や、他校への視察が行なわれており、情報共有も図られている。 ・授業スタンダードについては、年度内の実践を目指している。	・指導教諭を中心として、OJT校内チーム研修や研究授業・公開授業を実施した。OJT校内チームメンバー以外への広がり、全体の気運の高まりという点では課題あり。 ・授業スタンダードは指導教諭を中心に作成し、各教科からの意見を求めて策定した。3学期から実践している。教員全員の意識改革を進めて、来年度以降も継続することで、授業改善へとつないでいきたい。 ・大学入試改革との関連から、校外研修にも積極的に参加した。全体への情報共有は改善の余地がある。	B B B	B	A 当初の見込みを超える取組を行うことができ、目標を上回る達成状況である。
		重点② キャリア教育の充実 特別活動をはじめとする様々な教育活動をキャリア教育の視点で連携させ、7つの力の育成を一層図る。 計画と評価：「キャリア・ノート」の活用(振り返り・記録の徹底) 校内研修の実施、各種アンケートや生徒自己評価	・学期終わりに振り返りの時間を設けて、「キャリア・ノート」への記録を行っている。また、1年では、JAPAN e-Portfolioの活用も進めている。生徒の取り組みにはクラス差や個人差があること、また教員側の環境整備も今後の課題である。 ・教員向けの校内研修は2学期に実施予定である。	・本校作成の「キャリア・ノート」、民間システムを活用してのJPAN e-Portfolioへの記録・入力を行っている。振り返り等の記録をすることの意義について、生徒へ十分に理解させると同時に、教員の指導体制などの確立も急務である。年度末に向けて、生徒自身による自己点検と担任のチェックにより、さらに記録の徹底を図っていきたい。 ・新学習指導要領におけるキャリア教育の位置づけや総合的な探究の時間などについて、年度末に校内研修を実施した。情報提供等は、継続していくこととしている。 ・7つの力の育成については、学年や総務課の実施したアンケートでは、概ね良好な結果である。	B B B	B	B 当初の見込みどおりの取組を行うことができ、ほぼ目標どおりの達成状況である。 C 当初の見込みの取組を行うことができず、目標を下回る達成状況である。

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期		年度末						学校関係者評価	
					達成状況	個別評価 総合評価	達成状況	個別評価 総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切さ		
①	学力向上委員会	公開授業やOJT校内チーム研修等による研究授業を促進し、主体的・対話的で深い学びを実現し、学力向上に資する授業力の向上を図る。	・OJT校内チーム研修による課題の共有、実践を行う。 ・新学習指導要領を踏まえた授業研究を進め、全体での共有を図る。 ・公開授業・研究授業の成果を校内外に発信する。	・研究授業を実施または参観した教員の割合が90%以上（教員） ・学校自己評価アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合が80%以上（生徒）	・研究授業の実施に向けて、OJT校内チーム研修を行いながら、「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業研究を行っている。10月までに全体研修を2回、チーム別研修をチームごとに実施している。 ・県総合教育センター指導主事を講師に招き研修を行うとともに、内容について職員会議で周知した。 ・OJTチーム研修においてルーブリックの活用と、各教科に授業スタンダードの意見を求めている。	B —	B	・OJT校内チーム全体研修を年4回実施した。研究授業の実施に当たり、外部講師を招いたり他校の研究授業を参観に行ったりして、新学習指導要領を踏まえた研究テーマを深めた。また、研修成果を校内においては公開授業や職員会議で、校外においては指導教諭の研修会等で周知した。 ・研究授業を実施・参加した教員の数は、97%である。 ・OJTチーム及び各教科から、本校において取り組むべき授業スタンダードの意見を集約し、3学期から教師版・生徒版として実施している。 ・学校自己評価アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合は、全体では78%であった。	B B	B	・研究授業では、各チームが「主体的対話的で深い学び」をテーマに授業研究に取り組み、ペア学習やグループ学習等の形態、発問や課題発見の方法等の探究において工夫することができた。 ・OJTチームから各教科への還元が十分できていない。 ・学校教育診断アンケート「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」の項目のプラス評価の割合は、2つの学年では80%を超えたものの、学年により評価にばらつきがあった。	・新学習指導要領で求められている授業について、理解と実践が進むよう、OJT校内チーム研修の継続的な実施及び成果発表の機会を設定する必要がある。 ・県内外の研究授業等を積極的に活用する。 ・学校自己評価アンケートの「授業の進め方等に工夫が見られ、分かりやすく充実した授業である」という項目だけでなく、具体的な改善点に分かる質問の工夫が必要。併せて、生徒自身の取組を振り返る項目も検討したい。 ・西高授業スタンダードが教員・生徒ともに実効性のあるものとなるよう、適時確認の機会を設ける。	妥当である。	適切である。
	教務課	平成34年度から実施される学習指導要領の内容を踏まえ現行内規の見直しを進めていく。	・①学校現状と内規の整合性がとれるように見直しをする。 ・②学習指導要領の改訂に関する情報を提供し、検討すべき箇所を各担当により洗い出していく。	・①を各課に依頼し、現状にあった内規の見直しができる。 ・②学習指導要領の改訂内容を共有し、内規見直しをすべき部分を意識することができる。	・内規についての見直しは、全体に向けて声かけをし、各部署において現在進行しているところである。 ・年度途中ではあるが、「履修認定」に関する条件について、職員会議において協議し、変更した。 ・高等学校新教育課程岡山県説明会の総則部会に出席し、情報を得たものを各教科へ提供し、その他の各部会についても案内し、出席していただくようにしている。	B B	B	・内規についての見直しは、各部署において現在進行しているところである。 ・高等学校新教育課程岡山県説明会の総則部会・各部会への出席、各教科における情報の共有など、新課程への対応の準備が進んでいるところである。	B B	B	・内規については、部分的な見直しは各部署で検討されているが、全教員が全体を俯瞰して進めていく意識を持つことは十分にできていない。 ・新教育課程への意識の高揚を図られているが、未だ形にはできていない。	・現状把握と課題認識を全教員に周知徹底できるように、情報交換や伝達、対話する機会をさらに設ける。 ・学校運営の根幹に係るところ（例えば、アドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーなど）を整備していく。 ・先進校や研究指定校などを訪問し、情報収集を図る。	妥当である。	適切である。
	商業科	新学習指導要領を見据え、学力向上を目的とした授業改善（ICTの効果的な活用や情報教育も含めた）を図りながら、授業内容の課題を文書化し共有する。	・研究授業及び公開授業を通し、授業見学を行い、授業づくりに参画する。 ・学期や定期考査ごとに振り返りながら、課題を明らかにし、指導法を研究する。	・各科目指導計画書を、主要科目を中心として作成し、授業内容の課題を共有できる。	・機会を捉えて、授業における課題や指導法についての研修を各科目担当者間を中心として行った。また、新学習指導要領の内容に関する研修会や教科「商業」の授業力向上のための各分野における研修会にも参加し、科内で情報共有した。授業の進捗状況は、商業科教員間で連絡調整をし、共有した。	B	B	・年間を通じて、商業に関する学校外での研修会に教員が参加し、商業科内で情報を共有し、授業改善及び業務改善に取り組むことができた。研修で得られた成果で、本校で取り入れられるものについては、取り組んでいく土壌がある。新学習指導要領への対応等は今後も校内外の状況を見ながらの検討課題である。	B	B	・商業科目はいくつかの分野（大きく4つの分野）があり、学校外での研修会の資料や成果を、資料回覧や担当者間研修、資料整理等で共有することができた。新学習指導要領への対応についても科内会議等で一歩前に進めることができた。	・商業科内、各学年及び科目担当者間において、新学習指導要領の趣旨を生かした主要科目の指導計画書の共同作成や情報共有により、授業改善や授業力向上につながると考える。	妥当である。	適切である。
	国際情報科	岡山大学留学生との交流会、イングリッシュキャンプ、校内外のスピーチコンテストなどの行事に向けて生徒が主体的に課題を見つけ学ぶ授業を展開する。	・主体的・対話的で深い学びの実現に向けて各行事の評価と改善を行う。 ・各行事の目的と目標を明確に示し、具体的な計画を立てさせる。	・8割以上の生徒が、行事ごとの振り返りと年度末のアンケートに、自らの主体的な取り組みと深い学びを具体的に表現できる。	・異文化理解講座と岡山大学留学生との交流会を実施した。異文化理解講座では、ただ受動的に聞くのではなく積極的に講義に参加したり質問に答えたりしていた。また、岡山大学留学生との交流会でも、生徒は計画的に準備し、当日は英語を介して様々な国の学生たちと活発に交流できていた。振り返りの中で、生徒たちは発信力や協力する力などに確実に伸びを感じ、体験を通して今後への課題を設定していた。11月以降のイングリッシュキャンプ、異文化理解講座、校内英語スピーチコンテストでもそれぞれの目標を設定し、主体的に取り組ませていきたい。	—	B	・異文化理解講座①では領事館から講師を招き、留学に関する情報や準備、奨学金制度等について知る機会を提供した。イングリッシュキャンプではディベート、スキット、その他の活動について授業に計画的に組み込んで準備をさせ、生徒が主体的に取り組めた。壁新聞をやめて描写とインタビューの活動を新たに加えた。昨年度の時間を守るなどの課題を改善し、自分で考えて教員の補助をするなど行動することができ、昨年度よりも質が向上したと言える。ALTからも高評価をもらった。2年生の活躍を見て1年生が刺激を受け振り返りなどでも来年への橋渡しができていた。 ・アンケートでは「行事は生徒が中心になって主体的に進められている」「じっくり考えたり、調べたりする時間が取られている」の項目で（よく）あてはまるの回答が多かった。また、身に付いた力と自分の果たした役割、学んだ内容、選んだテーマについて記述させたところ、具体的に書けている生徒もいたが、大半が役職名で終わっていた。	B	B	・留学生との交流会、イングリッシュキャンプは授業で綿密な準備を行い、有意義な活動となった。外国人を前に準備したプレゼンテーションや実演をする緊張感は何物にも代えられない。発表の場があることで、授業の緊張感も持続することができた。担任、教科指導担当も連携がよくできており、指導方法も引き継ぎ、改善してきている。スピーチコンテストも2年生の発表を1年生が見ることでさらに向上していくと考えられる。	・異文化理解講座については、オールイングリッシュで行う条件を定着させ、内容を吟味して今後も続けていく。イングリッシュキャンプは数年に一度は内容を見直し、改善を行っている。今年度も新たな活動を2つ設けて実施した。さらに検証して内容を充実させていきたい。 ・振り返りについては毎回のワークシートとグループの話し合い等で行うことができたが、計画を立てさせる点で課題が残った。また、自らの取り組みの成果を具体的に表現できるようにする指導が必要と感じた。	妥当である。	適切である。

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中 間 期			年 度 末					学校関係者評価	
					達成状況	個別評価	総合評価	達成状況	個別評価	総合評価	結果の分析	改善のための方策	評価の妥当性	改善方策の適切さ
①	1年	基礎学力向上に向け、家庭学習の習慣を定着させる。	・家庭学習の時間を平日2時間、休日3時間確保させる。P D C Aサイクルにより、個々の課題を明確にさせる。	・家庭学習2時間以上の割合を60%以上。	・6月調査では、2時間以上64.6%、3時間以上25.2%であった。わずかであるが当初の基準はクリアした。文理科目選択を経て個々に、より具体的な目標が設定される。計画的な取組みを実践し学習時間を増大させる。3時間以上60%を目指す。	B	B	・11月調査では、2時間以上40.6%、3時間以上11.0%となり、2学期中のだるみが数値に表れていると思う。1月調査では、2時間以上54.6%、3時間以上19.9%であった。二年生進級に向け、より主体的な取組みが期待できると分析したい。	B	B	・具体的な目標が設定できていないため、宿題以外の家庭学習の必要を感じる生徒が少ないようである。	・より具体的な進路目標の設定をさせる。毎日の「目標－学習－評価」のサイクルを記録させる。1年次を振り返り、より効果的な学習法を身に付けさせる。	妥当である。	教科の課す課題の内容を精選する必要があるとの指摘を受けた。
	2年	深い学びに繋がるように授業力のさらなる向上を達成することにより、生徒たちが積極的に授業や学習に取り組むようになる。	・お互いの授業を参観し合い、教科内だけでなく教科間でも連携を図りながら授業改善する。 ・調査、実力考査などのテスト前に目標を立て、テスト後に振り返りをさせることによって、自分の学力を把握させる。	・年度の始めと年度の終わりにアンケートをとって、積極的に授業や学習に取り組むようになったと答える生徒が6割を超える。	・4月のアンケート結果では授業には集中して前向きに取り組めているか？に対してよくできているが24.4%、まあまあできているが64.4%（肯定的な意見が88.8%） ・10月の参観授業やOJTを活用してお互いの授業を参観し合い、授業改善を行う予定である。 ・テスト後に振り返りを行うことで、自分の学力を把握させている。	B	B	・12月にとったアンケート結果では、「4月の時点より前向きに学習や授業に取り組んでいますか？」の問いに対して「できている」が96人/306人で31%、「まあまあできている」と答えた人が150人/306人で49%、両方を合わせると246人/306人で80%になった。	B	B	・予習や課題はやってこないが、授業には真面目に取り組もうとしている姿が見られる。4月より授業や学習に対して積極性が見られるようになったが、授業によって、クラスによって、状況によって、居眠りをする生徒がいたり、予習や課題を全くしてこない生徒も48人/306人いたりすることがわかったので、今後は予習をして授業に臨むようにさせたい。	・予習→授業→復習（課題）のリズムをつけることが学習効果を最大限にできることを理解させたい。授業始めに予習ができているかのチェックをする。	妥当である。	適切である。
	3年	一人一人が授業力を磨き、生徒の学力とモチベーションの向上につなげることににより、希望の進路実現のために主体的に考え努力する生徒を育成する。	・学期や考査の後の振り返りをさせ、学力の伸びを確認させる。 ・実力考査や模試の後の分析を丁寧に行い、次に打つべき手をその都度考える。	・進路指導課の年度末のアンケートで、希望の進路実現のために「よく努力した・まあまあ努力した」と回答する生徒が8割を超える。	・一学期の振り返りは、C C Tの時間を利用して行った。 ・模試や考査ごとに振り返りや、テスト直しを綿密に行なっている教科もある。 ・実力考査と校外模試の結果が返ってくるたびに、各教科および学年団で、分析を行っている。データを眺めるだけでなく、大きく成績の上下した生徒などにも注意を払うようにしている。	—	B	・2月初めの登校日に実施した進路課のアンケート結果によると、自分自身の学習への取り組みについて「よく努力した・まあまあ努力した」と回答した生徒は学年全体で約71%であった。学科別にみると商業科78%、普通科66%、国理科は83%であった。	B	B	・国理科のみ8割達成。商業科はあと一步。しかし、普通科の生徒たちの自己評価がとても低いことが分かった。しっかり努力をしたと胸を張って卒業してもらいたいとの思いから立てた学年の目標ではあったが、「もっと努力すればよかった」という普通科の生徒たちの真面目な思いが数字に表れる結果となってしまった。	・控えめで、今一つ自分の学力に自信の持てない生徒たちに、もっと早い時期から高い目標と進路意識を持たせる工夫を考える必要がある。	妥当である。	適切である。
②	キャリア教育委員会	「キャリア・ノート」の充実・活用を通して、キャリア教育を推進する。	・職員研修を実施したり、「キャリア教育の手引き」を改訂したりすることで、キャリア教育推進に寄与する。 ・総合的な学習の時間の内容やその他の教育活動を見直す。また、生徒への情報提供を積極的に行う。	・総合的な学習の時間の評価やキャリア教育の年間計画等が見直されている。 ・職員研修1回以上、情報提供2回以上。 ・インターンシップ等を体験した生徒の割合が80%以上(3年、2年)	・評価については年度初めに見直しを行ったが、来年度から総合的な探究の時間と変更になるのを受けて、さらに見直しを行う必要がある。年間計画については、今後見直しを行う。 ・総合的な探究の時間の新学習指導要領に関する情報提供は教員向けに1回、大学入試改革とそれに関連する情報の提供は教員・生徒とも数回行った。今後職員研修も実施予定である。 ・インターンシップ等を体験した生徒の割合は、3科平均で3年77.3%、2年83.3%である。	B B B	B	・総合的な学習の時間の評価の在り方については、調査書の様式変更となる第1学年から改善した。「キャリア教育の手引き」では、評価、課題研究の進め方、キャリア教育の年間指導計画、新学習指導要領などを盛り込んで改訂した。 ・職員研修は1回実施。情報提供は数回実施。 ・インターンシップ等を体験した生徒の割合は、3科の平均で3年78.8%、2年83.4%であった。	B B B	B	・「キャリア教育の手引き」を改訂して終わりではなく、いかに活用してもらうかが鍵となる。 ・情報提供は行ったものの、十分に理解されているとはいいがたい。 ・インターンシップ等については、県の実施する事業を十分に活用できなかった。2年商業科では保育園実習を実施しており、100%。現状では、修学旅行の関東コースの企業訪問によるところが大きく、関東コースの選択人数で左右される。	・来年度の新入生から、総合的な探究の時間になることを踏まえて、学年単位で研修を行うなどの必要がある。 ・今後も関連する情報提供を行って行く。 ・来年度以降も県の事業を活用しつつ、学校独自の事業を行ったり、社会貢献活動と融合させるなどの校内の新たな体制を作ったりする必要があると考える。	妥当である。	適切である。
	総務課	「キャリア・ノート」の活用を進め、コミュニケーション能力の育成・伸長を図る。	・7つの力の育成を意識しながら、コミュニケーション能力育成プログラムやC C T等様々な活動の実施を補助する。 ・修学旅行や課題研究等様々な場面をとらえ、生徒が積極的に発信する場面の設定を補助する。	・プログラム実施前後のアンケートで、肯定的評価の割合が増加する。	・1年生に対し、外部講師による講演会を行い、「コミュニケーションとは？」という意識づけを行った。各プログラム実施前には学年会で事前研修を行い、各担任の持ち味を発揮した活動が行われている。 ・2年生の修学旅行では企業訪問・班別自主研修等を通して、事前・事後学習も含め、身に付けたコミュニケーション能力を発揮し、発信する場面が多く設定された。	B	B	・プログラム前後のアンケート結果では、すべての質問項目に対し、肯定的回答の割合の伸びが見られた。	B	B	・授業を参観しても、例年以上に、各担任が積極的に指導に取り組んでおり、生徒の活動も活発であった。このことがアンケート結果に表れていると思われる。	・来年度に向けては、プログラム実施時間数の削減が予定されているが、少ない時間数でのより効果的な実施方法を検討する必要がある。	妥当である。	適切である。
	生徒課	学校内外での諸活動を通じて、生徒が豊かな人間性や社会人として必要な資質を身に付けるための援助を行う。	・T P Oに応じた態度の醸成を通じて、社会的自立に必要な情況把握力・傾聴力を向上させる。 ・社会貢献活動を通じて、協力する力・自他肯定力・柔軟性の向上をはかる。 ・生徒会活動などの特別活動や部活動を充実させ、心身の健全な成長を促しながら、発信力・実行力を向上させる。	・制服の着こなしや頭髮などの身嗜みを、ルールやマナーを意識して整えることができる。 ・積極的に挨拶をすることができる。 ・特別活動や課外活動に能動的に参加している。	・雰囲気や著しく損なう制服の着崩しはないが、スカートの短い生徒は1年生にすら散見される。制服の仕様改正を無意味化しない取組みが必要である。 ・挨拶ができる生徒は増加しているが、誰に対してでもない。具体的ルール化はそぐわないが、掲示物による啓発等を通じ教員や来客と挨拶をかわす環境をつくる必要がある。 ・特別活動への取り組みは活発である。今後は睨み、部活動は最終下校時刻の遵守徹底を図る必要がある。	B B A	B	・新仕様のスカートを採用した1年生の女子には、極端にスカートの丈が短い生徒は見られなくなったが、学校全体としてはまだ散見される。頭髮も染色している生徒もわずかがいて、粘り強い指導を必要とした。 ・挨拶ができる生徒は10年前に比較して増えたが、まだ学校としての評価としては定着していない。 ・生徒会活動は秋祭祭などへの取組みにおいて自主性を発揮した。社会貢献活動も積極的な取組みが見られた。部活動も全国大会以下各種大会で顕著な成績をあげる部もあった。	B B B	B	・「鉄は熱いうちに打て」のとおり、身嗜みや挨拶などのマナーの定着は1年生からの指導が鍵を握っている。学校全体としての成果を出すのは年月がかかるが、将来に期待できる生徒の状況だと考える。 ・自由な校風・生徒の自主性を維持しながら、地域社会からも評価される学校となるのは、生徒への意識づけが必要だが、その点で特別活動や部活動は重要な役割を果たした。	・本校は長い歴史を持つ伝統校で自由を尊ぶ校風である。しかし、生徒も毎年入れ替わり、教員も異動により顔ぶれが変わり、保護者や地域社会の価値観も変化していく中で、学校のカラーや方針を微調整することは必要である。そのような修正には生徒間・教員間、生徒と教員間の「どうあるべきか」という双方向的な対話が欠かせないと考える。	妥当である。	適切である。
	進路指導課	キャリア教育委員会や英語科と連携して新たな入試制度への対応を始めるとともに、現在の在校生の望ましい進路を保障する。	・『進路便り』、C C T、保護者説明会等を利用して、新入試制度のしくみや日程について生徒・保護者に周知させる。 ・各学年のそれぞれの段階で取り組ませるべき進路課題を意識させ、卒業まで粘り強く進路実現に向けて頑張り抜く生徒を増やす。	・1年生のすべての生徒が新入試制度の方向性（共通テストにおける記述問題の導入・英語外部試験の導入・ポートフォリオ評価の導入）を理解している。 ・3年生、普・国の生徒の83%以上がセンター試験を受験する。3年生商業科の生徒は、進路決定後の欠席率が昨年度よりも減少している。	・1年生については、ベネッセ・マナビジョンを使用して、JePへの対応を行っている。（クラスによって生徒の入力状況に差があるのが課題） ・3年生のセンター試験出願者は206名。うち普・国の生徒は200名が出願（全体の約85%）。	B B	B	・1年生は、ベネッセ・マナビジョンを使用して、JePへの入力を行っている。12月にはGTEC-CBTを受験（普国全員、商業希望者）。新入試制度については、1年生全員が理解できているものと思われる。 ・センター試験の受験者は昨年度並み。 3年生商業科の2学期における欠席総数は108日（昨年度229日）で大幅に減少している。	B B	B	・キャリア教育委員会と1年団を中心に、生徒に対する丁寧な指導がなされていると考える。 ・例年と比べて、商業科の生徒の進学や進路に対する意識が高く、国公立大志望者も多かったのが、2学期以降の欠席率減少につながっている。もちろん、担任の指導も大きい。	・JePへの入力指導については、入力端末の整備とスマホ等の使用に関するルールの見直しが必須。また、全教職員へJePに関する研修も必要である。 ・本校は、他校と比べて進路決定の時期が様々であり、一律にセンター試験を受験させることで、学習へのモチベーションを維持させるという指導は徹底しづらい。進路決定後の指導のあり方について、全体としての議論や共通理解が必要。	妥当である。	入学生とその保護者への進路状況報告を行うべきであるとの指摘あり。

該当する経営目標の番号	課・学科・学年等	具体的目標	具体的計画	達成基準	中間期			年度末				学校関係者評価		
					達成状況		個別評価	総合評価	達成状況		個別評価	総合評価	結果の分析	改善のための方策
②	図書課	未貸出者数を減らし、貸出冊数を増やすことによって、読書に親しむ態度を育てる。	・ビブリオバトルで本をなかだちとしたコミュニケーションを体験し、読書に親しむ態度を育てる。 ・小論文コーナーの整備・充実を図り、読書への関心を深める。	・29年度未貸出者数は33.7%まで大幅に減少した。本年度は、未貸出者数が30%程度に減少し、図書館に来館する生徒が増加する。	・2年生ビブリオバトルは7月に実施し、一定の成果があった。また、小論文コーナーは参考図書を購入し整理を進めており、生徒の利用も増え始めた。 ・図書館の利用状況は良好だが、貸出冊数は9月末現在、昨年同期に比べ約1,000冊減少しており、未貸出者は全校生徒の約60%に上る。読書月間や小論文コーナーの生徒への周知によって利用促進に努めている。	C	C	・未貸出者数は391人・41.2%（2月末現在）で29年度より8.0ポイント増加、貸出冊数も4,367冊と昨年度より大幅に減少した。 ・ビブリオバトルLHRは1・2年生とも有意義な取り組みができ、事後の展示も一定の成果があった。 ・小論文関連の書籍を充実させ、配架も工夫した結果、生徒の認知度が上がり利用につながった。	B	B	・図書館の利用状況は非常に良好で、司書によるレファレンスもあり、貸し出されている本の質は良いが利用者が特定の生徒に限られて広がりが見られず、未貸出者の割合が増えてしまった。 ・ビブリオバトルは読書の楽しみを知る取り組みとして定着してきた。 ・小論文関連の定番の書籍が生徒の実態にそぐわない面もあり、司書の案内に頼っているのが実情である。	・未貸出者数減少には、やはり年に1～2回クラス単位の働きかけが必要と思われる。また、その際、読書係を中心に教員による図書委員へのバックアップも欠かせない。 ・本年度は授業での図書館利用も減少しており、次年度はより積極的な利用を促進し、貸出冊数の増加につなげたい。 ・小論文コーナーは、より生徒の実情に合った書籍を充実させ生徒の利用を促す。	貸し出し数が減少した理由は理解でき、貸し出した本の質は評価できる。	適切である。
	1年	ライフプランを描き、進路意識の高揚を図る。	・「進路の手引き」、「キャリア・ノート」を積極的に活用する。 ・あらゆるメディアを活用し、積極的に情報収集・分析をする。	・年度末にアンケートし、進路意識が深まった者が90%以上。	・CCTの課題であるオープンスクール参加レポート、職業調べ等で、各自のキャリアプランの情報収集、分析は取組めている。大学訪問等でさらなる意識高揚と、高い目標到達に向けた学習計画実践に取り組む。	B	B	・3学期のアンケートから、進路意識が高まったものは、84.3%であった。概ね目標には達したと思える。 ・JePへの入力から、進路意識は少なからず高まっていると思える。	B	B	・積極的な取り組みは、まだまだ見えない	・キャリアプランを考えさせる。主体的なその実現に向けての取り組みをさせる。	妥当である。	適切である。
	2年	「キャリア・ノート」を活用し、7つの力を付ける。	・CCTや修学旅行前後の学習、学年集会の時間で、自分の意見や考えを発表する機会、人の発表を聞く機会を増やす。 ・「キャリア・ノート」を活用させ、自分の振り返りを行いながら、7つの力が付けられたか確認させる。	・年度の始めと年度の終わりにアンケートを実施し、自分の力がアップしたと感じる生徒が6割を超える。	・4月のアンケート結果では、「昨年のCCTなどを通してコミュニケーション能力（特に発信力、傾聴力）がついたと思うか」という問いに対して「よくついている」（9.9%）、「まあまあついている」（66.6%）であった。修学旅行の事前・事後の学習、新聞作り、「キャリア・ノート」での振り返りをさせている。	－	B	・12月にとったアンケート結果では、「あなたは、1年次よりコミュニケーション能力（特に発信力、傾聴力）がついたと思いますか?」という問いに対して、「よくついている」と答えた生徒が59/306人で19%、「まあまあついている」と答えた生徒が200/306人で65%、両方合わせると259人/306人で85%がアップしたと感じている。	B	B	・さまざまな機会を通して全員の前で発表するようにさせた結果、4月よりはコミュニケーション能力がついた、と答えた生徒が85%になった。自己評価ではあるが、成長していると言える。	・今後はプレゼンテーション能力など進路に直結するコミュニケーション能力をつけさせていきたい。	妥当である。	適切である。
	3年	7つの力の育成・伸長を図る。（その中でも実行力に重点を置く）	・「キャリア・ノート」と併せて、スケジュール帳の効果的な使用を促す。 ・スケジュール管理を意識させることで、今何をすべきかを考え、主体的に行動する実行力を伸ばす。	・アンケートの結果、スケジュール帳をしっかりと活用したと答える生徒が50%を超える。	・現時点で、何割の生徒が上手に活用しているか数値を示すことはできないが、昨年度は使っていなかったと思われる男子生徒が、スケジュール帳を持って歩いているなど、利用が広がっているように感じる場面はある。 ・3年生は今こそ受験スケジュールをしっかりと管理すべき時なので、折に触れて意識させる声掛けをしていきたい。	－	B	・アンケートの結果、今年度配布したスケジュール帳をしっかりと活用したと答えた生徒は、132人（42%）、まあまあ活用できたと答えた生徒と合わせると238人（75%）であった。2年次にはしっかりと活用できた生徒は35%だったので、積極的に活用する生徒が確実に増えたが、目標の人数までは届かなかった。 ・実行力を自分で5段階評価させた数値の平均は、昨年度4.11から微増の4.15であった。	B	B	・商業科では50%、普通科の文系も52%で合計5クラスは達成できている。国際情報科は49%、普通科理系のみ15%の達成率しかなく、大きく差が開いた形となった。理系は男子生徒の多いクラスで、性差が顕著に表れたとも考えられる。 ・しっかりと活用できた生徒からは「予定の把握がスムーズで助かった」「受験期のスケジュール管理がしやすかった」「今後もこの習慣を続けたい」などのコメントが聞かれた。	・この学年では2年間小さなスケジュール帳を持たせ、活用させる取り組みを行った。配布されたもの以外の自分の好きな手帳を使いたがる生徒や、スケジュール管理もスマホのアプリを使っているという生徒もあり、全員一斉に同じものを使わせる難しさもあった。どのような形で取り組むのが良いか、検討の余地がある。 ・積極的に使った生徒の声を聴くと、本当に良い効果が期待できることが分かる。使うのを面倒くさがる生徒にもその良さを伝えたい。	妥当である。	適切である。
	普通科	キャリア教育の推進を通して、各学年の段階に応じた進路意識を持たせ、目標達成のために取り組む力を付けさせる。	・進路学習をはじめとするキャリア教育に関わる教育活動やLHR、担任による面接等の機会を利用して、生徒に積極的に働きかける。	・キャリア教育委員会や進路指導課など関係する各校務分掌の成果や調査結果を参考に総合的に判断する。	・CCTやLHR等の活動について計画されたものは予定通り実行されている。各担任における個人面談や声かけでもキャリア教育を意識した内容で生徒への働きかけが行われている。成果については、個人差が大きく現時点での判断は難しい。1、2年次のうちから大学、学部、学科の調査研究に十分な時間をかけ、意識付けすることが重要と思われる。	B	B	・キャリア教育委員会、進路指導課、学年団等の取り組みを通して、学校全体としては適切な形で各学年の発達段階や状況に応じた進路意識の育成が図られている。	B	B	・関係する各分掌や学年団、担任による指導は丁寧に行われていると思われるが、生徒一人一人の進路希望が異なることなどから進路に対する意識にも個人差が大きく、すべての生徒が同様の高い進路意識を持っているとは言いがたい。	・1年次のうちに将来の職業選択や自分が興味・関心が持てる分野について考えさせ、目標とする大学が設定できるような働きかけが重要になる。2年次以降にはその目標達成に必要な学習時間の確保と、より詳細な大学・学部・学科研究に十分な時間をとるよう指導する必要がある。	妥当である。	適切である。
国際情報科	国際情報科の各行事における生徒の主体的取り組みを「キャリア・ノート」に保存させ、大学入試等で活用できるようにする。	・各行事ごとの振り返り（ポートフォリオ）シートを作成し「キャリア・ノート」に保存させる。 ・各行事ごとに振り返りをさせ、主体的7つの力の伸びを確認させる。	・各行事の取り組みの概要が「キャリア・ノート」に保存されている。	・各行事ごとに振り返りシートを作成し、個人の取り組みを評価させた。ほとんどの生徒が様々な文化に触れることの楽しさと、英語運用能力の必要性を肌で感じ、新たな目標設定ができていた。学業以外の実績がより重視されるようになることを鑑み、学校内の行事をきっかけとして、外部のイベント等にも積極的な参加を促したい。	B	B	・後半の行事も振り返りシートを作成し、取り組みを評価させた。 ・イングリッシュキャンプでは活動グループでも振り返りをさせ、意見交換をさせた。多くの生徒が行事を経験することで特に実行力の伸びを実感しており、入学当時は前に出ることが苦手だと答えていた生徒も発信力の伸びを感じていた。 ・アンケートの結果、行事の記録を「キャリア・ノート」に保存できている生徒は約5割であった。	B	B	・振り返りシートの改善はできたが、具体的な気づき、目標や計画が書けている生徒は少数。 ・ほとんどの生徒がコミュニケーションの7つの力の伸びを実感できている。	・振り返りシートを改善し、個人の取り組みを振り返らせることができたが、それぞれの行事の関連性を持たせることについて課題が残った。事実、感想に終わらず、内省や気づき、教訓、計画のレベルまで振り返りができるようにしたい。「キャリア・ノート」への保存が課題である。 ・一年の行事の目標を明確にしたカリキュラムを作成し7つの力を常に意識させて取り組ませ、達成度合いを測れるような取り組みが必要。	妥当である。	適切である。	
厚生課	・校内の環境美化に力を入れ、教育環境の整備に努める。 ・悩みを持つ生徒が安心して相談できる環境の整備に努める。	・トイレ・教室を重点的に清掃する。 ・長期欠席者・不登校生徒に対して適切に対応する。	・トイレ・教室がきれいになることで教育環境が整備されてる。 ・長期欠席者・不登校生徒が増加しない。	・トイレと教室の清掃状況は概ね良好と考えられるが、一部に不十分なところも見られる。 ・8月末での長期欠席者数（30日以上）は、7名（3年2名・2年3名・1年2名）であり、昨年度同時期と比較して1名増加している。教育相談係・学年団・保健室の連携を図り、必要に応じて思春期相談も活用しながら対応している。	B	B	・トイレと教室の清掃状況は概ね良好と考えられるが、一部に不十分なところも見られる。 ・思春期相談は生徒・保護者の利用があった。2月末での長期欠席者数（30日以上）は、26名（3年11名・2年10名・1年5名）である。	B	B	・施設の老朽化によるところも少なくはないが、清掃を徹底することで補える部分も多い。 ・長期欠席者数は、昨年度より13名増加（2月末）している。欠席理由は様々であるが、何らかの心理的要因によるものが多い。	・可能なものは施設の整備を進めると同時に清掃状況の改善に向けて整美委員会の活動を活性化する。 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーとの連携を強化する。	妥当である。	適切である。	